つてお坐りになつたら、お母さまは、ハンケチでご自分のお顔の下半分をかくし、叔父さまのお顔を見つめたまま、お泣きになつた。けれども、泣き顔になつただけで、涙は出なかつた。お人形のやうな感じだつた。

「直治は、どこ？」

と、しばらくしてお母さまは、私のはうを見ておつしやつた。

私は二階へ行つて、洋間のソファに寢そべつて新刊の雜誌を讀んでゐる直治に、

「お母さまが、お呼びですよ。」

といふと、

「わあ、また愁歎場か。汝等は、よく我慢してあそこに頑張つてをれるね。神經が太いんだね。薄情なんだね。我等は、何とも苦しくて、實に心は熱すれども肉體よわく、とてもママの傍にゐる氣力は無い。」などと言ひながら上衣を着て、私と一緒に二階から降りて來た。

二人ならんでお母さまの枕もとに坐ると、お母さまは、急にお蒲團の下から手をお出しになつて、さうして、默つて直治のはうを指差し、それから私を指差し、それから叔父さまのはうへお顔をお向けになつて、兩方の掌をひたとお合せになつた。

叔父さまは、大きくうなづいて、

「ああ、わかりましたよ。わかりましたよ。」

とおつしやつた。

お母さまは、ご安心なさつたやうに、眼を輕くつぶつて、手をお蒲團の中へそつとおいれになつた。

私も泣き、直治もうつむいて嗚咽した。

そこへ、三宅さまの老先生が、長岡からいらして、取敢へず注射した。お母さまも、叔父さまに逢へて、もう、心殘りが無いとお思ひになつたか、

「先生、早く、樂にして下さいな。」

とおつしやつた。

老先生と叔父さまは、顔を見合はせて、默つて、さうしてお二人の眼に涙がきらと光つた。

私は立つて食堂へ行き、叔父さまのお好きなキツネうどんをこしらへて、先生と直治と叔母さまと四人分、支那間へ持つて行き、それから叔父さまのお土產の丸ノ内ホテルのサンドウキッチを、お母さまにお見せして、お母さまの枕元に置くと、

「忙しいでせう。」

とお母さまは、小聲でおつしやつた。

支那間で皆さんがしばらく雜談をして、叔父さま叔母さまは、どうしても、今夜、東京へ歸らなければならぬ用事があるとかで、私に見舞ひのお金包を手渡し、三宅さまも看護婦さんと一緒にお歸りになる事になり、附添ひの看護婦さんに、いろいろ手當の仕方を言ひつけ、とにかくまだ意識はしつかりしてゐるし、心臟のはうもそんなにまゐつてゐないから、注射だけでも、もう四、五日は大丈夫だらうといふ事で、その日いつたん皆さんが自動車で東京へ引き上げたのである。

皆さんをお送りして、お座敷へ行くと、お母さまが、私にだけ笑ふ親しげな笑ひかたをなさつて、

「忙しかつたでせう。」

と、また、囁くやうな小さいお聲でおつしやつた。そのお顏は、活き活きとして、むしろ輝いてゐるやうに見えた。叔父さまにお逢ひ出來てうれしかつたのだらう、と私は思つた。

「いいえ。」

私もすこし浮き浮きした氣分になつて、につこり笑つた。

さうして、これが、お母さまとの最後のお話であつた。

それから、三時間ばかりして、お母さまは亡くなつたのだ。秋のしづかな黃昏、看

護婦さんに脈をとられて、直治と私と、たつた二人の肉親に見守られて、日本で最後の貴婦人だつた美しいお母さまが。

お死顔は、殆んど、變らなかつた。お父上の時は、さつと、お顔の色が變つたけれども、お母さまのお顔の色は、ちつとも變らずに、呼吸だけが絶えた。その呼吸の絶えたのも、いつと、はつきりわからぬ位であつた。お顔のむくみも、前日あたりからとれてゐて、頬が蠟のやうにすべすべして、薄い唇が幽かにゆがんで微笑みを含んでゐるやうにも見えて、生きてゐるお母さまより、なまめかしかつた。私は、ビエタのマリヤに似てゐると思つた。

六

戰鬪、開始。

いつまでも、悲しみに沈んでもをられなかつた。私には、是非とも、戰ひとらなければならぬものがあつた。新しい倫理、いいえ、さう言つても僞善めく、戀。それだけだ。ローザが新しい經濟學にたよらなければ生きてをられなかつたやうに、私はいま、戀一つにすがらなければ、生きて行けないのだ。イエスが、この世の宗教家、道德家、學者、權威者の僞善をあばき、神の眞の愛情といふものを少しも躊躇するところなくありのままに人々に告げあらはさんがために、その十二弟子をも諸方に派遣なさらうとするに當つて、弟子たちに敎へ聞かせたお言葉は、私のこの場合にも全然、無關係でないやうに思はれた。

「帶のなかに金・銀または錢を持つな。旅の囊も、二枚の下衣も、鞋も、杖も持つな。視よ、我なんぢらを遣すは、羊を豺狼のなかに入るるが如し。この故に蛇のごとく慧く、鴿のごとく素直なれ。人々に心せよ、それは汝らを衆議所に付し、會堂にて鞭たん。また汝等わが故によりて、司たち王たちの前に曳かれん。かれら汝らを付さ

ば、如何なにを言はんと思ひ煩ふな、言ふべき事は、その時さづけらるべし。これ言ふものは、汝等にあらず、其の中にありて言ひたまふ汝らの父の靈なり。又なんぢら我が名のために凡ての人に憎まれん。されど終まで耐へ忍ぶものは救はるべし。この町にて、責めらるる時は、かの町に逃れよ。誠に汝らに告ぐ、なんぢらイスラエルの町々を巡り盡さぬうちに人の子は來るべし。

身を殺して靈魂をころし得ぬ者どもを懼るな、身と靈魂とをゲヘナにて滅し得る者をおそれよ。われ地に平和を投ぜんために來れりと思ふな、平和にあらず、反つて劍を投ぜん爲に來れり。それ我が來れるは人をその父より、娘をその母より、嫁をその姑嫜より分たん爲なり。人の仇は、その家の者なるべし。我よりも父または母を愛する者は、我に相應しからず、我よりも息子または娘を愛する者は、我に相應しからず。又おのが十字架をとりて我に從はぬ者は、我に相應しからず。生命を得る者は、これを失ひ、我がために生命を失ふ者は、これを得べし。」

戰鬪開始。

もし、私が戀ゆゑにイエスのこの敎へをそつくりそのまま必ず守ることを誓つたら、イエスさまはお叱りになるかしら。なぜ、「戀」がわるくて、「愛」がいいのか、私にはわからい。同じもののやうな氣がしてならない。何だかわからぬ愛のために、戀のために、その悲しさのために、身と靈魂とをゲヘナにて滅し得る者、ああ、私は自分こそ、それだと言ひ張りたいのだ。

叔父さまたちのお世話で、お母さまの密葬を伊豆で行ひ、本葬は東京ですまして、それからまた直治と私は、伊豆の山莊で、お互ひ顏を合せても口をきかぬやうな、理由のわからぬ氣まづい生活をして、直治は出版業の資本金と稱して、お母さまの寶石類を全部持ち出し、東京で飲み疲れると、伊豆の山莊へ大病人のやうな眞蒼な顏をしてふらふら歸つて來て、寢て、或る時若いダンサアふうのひとを連れて來て、さすがに直治も少し間が悪さうにしてゐるので、

「けふ、私、東京へ行つてもいい？　お友だちのところへ久し振りで遊びに行つてみたいの。二晩か、三晩、泊つて來ますから、あなた留守番してね。お炊事はあの方に、たのむといいわ。」

直治の弱味にすかさず附け込み、謂はば蛇のごとく慧く、私はバッグにお化粧品やパンなど詰め込んで、きはめて自然に、あのひとと逢ひに上京する事が出來た。

東京郊外、省線荻窪驛の北口に下車すると、そこから二十分くらゐで、あのひとの大戰後の新しいお住居に行き着けるらしいといふ事は、直治から前にそれとなく聞いてゐたのである。

こがらしの強く吹いてゐる日だつた。荻窪驛に降りた頃には、もうあたりが薄暗く、私は往來のひとをつかまへては、あのひとのところ番地を告げて、その方角を敎へてもらつて、一時間ちかく暗い郊外の路地をうろついて、あまり心細くて、涙が出て、そのうちに砂利道の石につまづいて下駄の鼻緒がぷつんと切れて、どうしようか

と立ちすくんで、ふと右手の二軒長屋のうちの一軒の家の表札が、夜目にも白くぼんやり浮んで、それに上原と書かれてゐるやうな氣がして、片足は足袋はだしのまま、その家の玄關に走り寄つて、なほよく表札を見ると、たしかに上原二郎としたためられてゐたが、家の中は暗かつた。

どうしようか、とまた瞬時立ちすくみ、それから、身を投げる氣持で、玄關の格子戸に倒れかかるやうにひたと寄り添ひ、

「ごめん下さいまし。」

と言ひ、兩手の指先で格子を撫でながら、

「上原さん。」

と小聲で囁いてみた。

返事は、有つた。しかし、それは女のひとの聲であつた。

玄關の戸が内からあいて、細おもての古風な匂ひのする、私より三つ四つ年上のや

うな女のひとが、玄關の暗闇の中でちらと笑ひ、
「どちらさまでせうか。」
とたづねるその言葉の調子には、なんの惡意も警戒も無かつた。
「いいえ、あのう、」
けれども私は、自分の名を言ひそびれてしまつた。このひとにだけは、私の戀も、奇妙にうしろめたく思はれた。おどおどと、ほとんど卑屈に、
「先生は？　いらつしやいません？」
「はあ。」
と答へて、氣の毒さうに私の顏を見て、
「でも、行く先は、たいてい、……」
「遠くへ？」
「いいえ。」

と、可笑しさうに片手をお口に當てられて、
「荻窪ですの。驛の前の、白石（しらいし）といふおでんやさんへおいでになれば、たいてい、行く先がおわかりかと思ひます。」
私は飛び立つ思ひで、
「あ、さうですか。」
「あら、おはきものが。」
すすめられて私は、玄關の内へはひり、式臺に坐らせてもらひ、奥さまから輕便鼻緒とでもいふのかしら、鼻緒の切れた時に手輕に繕ふことの出來る革の仕掛紐をいただいて、下駄を直して、そのあひだに奥さまは蠟燭をともして玄關に持つて來て下さつたりしながら、
「あいにく、電球が二つとも切れてしまひまして、このごろの電球は馬鹿高い上に切れ易くていけませんわね、主人がねると買つてもらへるんですけど、ゆうべも、をと

とひの晩も歸つてまゐりませんので、私どもは、これで三晩、無一文の早寢ですのよ。」

などと、しんからのんきさうに笑つておつしやる。奥さまのうしろには、十二、三歳の眼の大きな、めつたに人になつかないやうな感じのほつそりした女のお子さんが立つてゐる。

敵、私はさう思はないけれども、しかし、この奥さまとお子さんは、いつか私を敵と思つて憎む事があるに違ひないのだ。それを考へたら、私の戀も、一時にさめ果てたやうな氣持になつて、下駄の鼻緒をすげかへ、立つてはたはたと手を打ち合せて兩手のよごれを拂ひ落しながら、わびしさが猛然と身のまはりに押し寄せて來る氣配に堪へかね、お座敷に駈け上つて、まつくら闇の中で奥さまのお手を摑んで泣かうかしらと、ぐらぐら烈しく動搖したけれども、ふと、その後の自分のしらじらしい何とも形のつかぬ味氣無い姿を考へ、いやになり、

「ありがたうございました。」

と、ばか丁寧なお辭儀をして、外へ出て、こがらしに吹かれ、戰鬪、開始、戀する、すき、こがれる、本當に戀する、本當にすき、本當にこがれる、戀ひしいのだから仕様が無い、すきなのだから仕様が無い、こがれてゐるのだから仕様が無い、あの奥さまはたしかに珍らしくいいお方、あのお嬢さんもお綺麗だ、けれども私は、神の審判の臺に立たされたつて、少しも自分はやましいと思はぬ、人間は、戀と革命のために生れて來たのだ、神も罰し給ふ筈が無い、私はみぢんも惡くない、本當にすきなのだから大威張り、あのひとに一日お逢ひするまで、二晩でも三晩でも野宿しても、必ず。

驛前の白石といふおでんやはすぐ見つかつた。けれども、あのひとはいらつしやらない。

「阿佐ケ谷ですよ、きつと。阿佐ケ谷驛の北口をまつすぐにいらして、さうですね、

一丁半かな？　金物屋さんがありますからね、そこから右へはひつて、半丁かな？
柳やといふ小料理屋がありますからね、先生、このごろは柳やのおステさんと大あつあつで、いりびたりだ、かなはねえ。」
驛へ行き、切符を買ひ、東京行きの省線に乘り、阿佐ヶ谷で降りて北口、約一丁半、金物屋さんのところから右へ曲つて半丁、柳やは、ひつそりしてゐた。
「たつたいまお歸りになりましたが、大勢さんで、これから西荻のチドリのをばさんのところへ行つて夜明しで飲むんだ、とかおつしやつてゐましたよ。」
私よりも年が若くて、落ちついて、上品で親切さうな、これがあのおステさんとかいふあのひとと大あつあつの人なのかしら。
「チドリ？　西荻のどのへん？」
心細くて、涙が出さうになつた。自分がいま、氣が狂つてゐるのではないかしら、とふと思つた。

「よく存じませんのですけどね、何でも西荻の驛を降りて、南口の、左にはひつたところだとか、とにかく、交番でお聞きになつたら、わかるんぢやないでせうか。何せ一軒ではをさまらないひとで、チドリに行く前に又どこかにひつかかつてゐるかも知れませんですよ。」
「チドリへ行つてみます。さようなら。」
また、逆もどり。阿佐ヶ谷から省線で立川行きに乘り、荻窪、西荻窪、驛の南口で降りて、こがらしに吹かれてうろつき、交番を見つけて、チドリの方角をたづねて、それから、教へられたとほり夜道を走るやうにして行つて、チドリの青い燈籠を見つけて、ためらはず格子戸をあけた。
土間があつて、それからすぐ六疊間くらゐの部屋があつて、たばこの煙で濛々として、十人ばかりの人間が、部屋の大きな卓をかこんで、わあつわあつとひどく騷がしいお酒盛りをしてゐた。私より若いくらゐのお嬢さんも三人まじつて、たばこを吸

ひ、お酒を飲んでゐた。

私は土間に立つて、見渡し、見つけた。さうして、夢見るやうな氣持ちになつた。ちがふのだ。六年。まるつきり、もう、違つたひとになつてゐるのだ。

これが、あの、私の虹、M・C、私の生き甲斐の、あのひとであらうか。六年。蓬髪は昔のままだけれども哀れに赤茶けて薄くなつてをり、顏は黄色くむくんで、眼のふちが赤くただれて、前齒が拔け落ち、絶えず口をもぐもぐさせて、一匹の老猿が背中を丸くして部屋の片隅に坐つてゐる感じであつた。

お嬢さんのひとりが私を見とがめ、目で上原さんに私の來てゐる事を知らせた。あのひとは坐つたまま細長い首をのばして私のはうを見て、何の表情も無く、顎であがれといふ合圖をした。一座は、私に何の關心も無ささうに、わいわいの大騒ぎをつづけ、それでも少しづつ席を詰めて、上原さんのすぐ右隣りに私の席をつくつてくれた。

私は默つて坐つた。上原さんは、私のコップにお酒をなみなみといつぱい注いでくれて、それから自分のコップにもお酒を注ぎ足して、

「乾杯。」

としやがれた聲で低く言つた。

二つのコップが、力弱く觸れ合つて、カチと悲しい音がした。

ギロチン、ギロチン、シユルシユルシユ、と誰かが言つて、それに應じてまたひとりが、ギロチン、ギロチン、シユルシユルシユ、と言ひ、カチンと音高くコップを打ち合せてぐいと飲む。ギロチンギロチン、シユルシユルシユ、ギロチン、ギロチン、シユルシユルシユ、とあちこちから、その出鱈目みたいな歌が起つて、さかんにコップを打ち合せて乾杯してゐる。そんなふざけ切つたリズムでもつてはずみをつけて無理にお酒を喉に流し込んでゐる樣子であつた。

「ぢや、失敬。」

と言つて、よろめきながら歸るひとがあるかと思ふと、また、新客がのつそりはひつて來て、上原さんにちよつと會釋しただけで、一座に割り込む。

「上原さん、あそこのね、上原さん、あそこのね、あああ、といふところですがね、あれはどんな工合ひに言つたらいいんですか？　あ、あ、あ、ですか？　ああ、あ、ですか？」

と乘り出してたづねてゐるひとは、たしかに私もその舞臺顏に見覺えのある新劇俳優の藤田である。

「ああ、あ、だ。ああ、あ、チドリの酒は、安くねえ、といつたやうな鹽梅だね。」

と上原さん。

「お金の事ばつかり。」

とお孃さん。

「二羽の雀に一錢、とは、ありや高いんですか？　安いんですか？」

と若い紳士。

「一厘も殘りなく償はずば、といふ言葉もあるし、或者には五タラント、或者には二タラント、或者には一タラントなんて、ひどくややこしい譬話もあるし、キリストも勘定はなかなかこまかいんだ。」

と別の紳士。

「それに、あいつぁ酒飲みだつたよ。妙にバイブルには酒の譬話が多いと思つてゐたら、果せるかなだ。視よ、酒を好む人、と非難されたとバイブルに錄されてある。酒を飲む人でなくて、酒を好む人といふんだから、相當な飲み手だつたに違ひねえのさ。まづ、一升飲みかね。」

ともうひとりの紳士。

「よせ、よせ。ああ、あ、汝らは道德におびえて、イエスをダシに使はんとす。チエちやん、飲まう、ギロチン、ギロチン、シユルシユルシユ。」

と上原さん、一ばん若くて美しいお嬢さんと、カチンと強くコップを打ち合せて、ぐつと飲んで、お酒が口角からしたたり落ちて、顎が濡れて、それをやけくそみたいに亂暴に掌で拭つて、それから大きいくしやみを五つ六つも續けてなさつた。

私はそつと立つて、お隣りの部屋へ行き、病身らしく蒼白く痩せたおかみさんに、お手洗ひをたづねまた歸りにその部屋をとほると、さつきの一ばんきれいで若いチエちやんとかいふお嬢さんが、私を待つてゐたやうな恰好で立つてゐて、

「おなかが、おすきになりません？」

と親しさうに笑ひながら、尋ねた。

「ええ、でも、私パンを持つてまゐりましたから。」

「何もございませんけど、」

と病身らしいおかみさんは、だるさうに横坐りに坐つて長火鉢に寄りかかつたまま

で言ふ。

「この部屋でお食事をなさいまし。あんな呑んぺえさんたちの相手をしてゐたら、一晩中なにも食べられやしません。お坐りなさい、ここへ。チエ子さんも一緒に。」

「おうい、キヌちやん、お酒が無い。」

とお隣りで紳士が叫ぶ。

「はい、はい。」

と返辭して、そのキヌちやんといふ三十歳前後の粹な縞の着物を着た女中さんが、お銚子をお盆に十本ばかり載せて、お勝手からあらはれる。

「ちよつと、」

とおかみさんは呼びとめて、

「ここへも二本。」

と笑ひながら言ひ、

「それからね、キヌちやん、すまないけど、裏のスズヤさんへ行つて、うどんを二つ

大いそぎでね。」

私とチェちやんは長火鉢の傍に並んで坐つて、手をあぶつてゐた。

「お蒲團をおあてなさい。寒くなりましたね。お飲みになりませんか。」

おかみさんは、ご自分のお茶のお茶碗にお銚子のお酒をついで、それから別の二つのお茶碗にもお酒を注いだ。

さうして私たち三人は默つて飲んだ。

「みなさん、お強いのね。」

とおかみさんは、なぜだか、しんみりした口調で言つた。

がらがらと表の戸のあく音が聞えて、

「先生、持つてまゐりました。」といふ若い男の聲がして、

「何せ、うちの社長つたら、がつちりしてゐますからね、二萬圓と言つてねばつたのですが、やつと一萬圓。」

「小切手か？」

と上原さんのしやがれた聲。

「いいえ、現なまですが。すみません。」

「まあ、いいや、受取りを書かう。」

ギロチン、ギロチン、シユルシユルシユ、の乾杯の歌が、そのあひだも一座に於いて絶える事無くつづいてゐる。

「直さんは？」

と、おかみさんは眞面目な顏をしてチェちやんに尋ねる。私は、どきりとした。

「知らないわ。直さんの番人ぢやあるまいし。」

と、チェちやんは、うろたへて、顏を可憐に赤くなさつた。

「この頃、何か上原さんと、まづい事でもあつたんぢやないの？　いつも、必ず、一緒だつたのに。」

とおかみさんは、落ちついて言ふ。
「ダンスのはうが、すきになつたんですつて。ダンサアの戀人でも出來たんでせうよ。」
「直さんたら、まあ、お酒の上にまた女だから、始末が悪いね。」
「先生のお仕込みですもの。」
「でも、直さんのはうが、たちが悪いよ。あんな坊ちやんくづれは、……」
「あの、」
私は微笑んで口をはさんだ。默つてゐては、かへつてこのお二人に失禮なことになりさうだと思つたのだ。
「私、直治の姉なんですの。」
おかみさんは驚いたらしく、私の顏を見直したが、チエちやんは平氣で、
「お顏がよく似ていらつしやいますもの。あの土間の暗いところにお立ちになつてゐ

たのを見て、私、はつと思つたわ。直さんかと。」
「左樣でございますか。」
とおかみさんは語調を改めて、
「こんなむさくるしいところへ、よくまあ。それで？　あの、上原さんとは、前から？」
「ええ、六年前にお逢ひして、……」
言ひ澱み、うつむき、涙が出さうになつた。
「お待ちどうさま。」
女中さんが、おうどんを持つて來た。
「召し上れ。熱いうちに。」
とおかみさんはすすめる。
「いただきます。」

おうどんの湯氣に顏をつつ込み、するするとおうどんを啜つて、私は、今こそ生きてゐる事の佗しさの、極限を味はつてゐるやうな氣がした。

ギロチン、ギロチン、シュルシュルシュ、ギロチン、ギロチン、シュルシュルシュ、と低く口ずさみながら、上原さんは私たちの部屋にはひつて來て、私の傍にどかりとあぐらをかき、無言でおかみさんに大きい封筒を手渡した。

「これだけで、あとをごまかしちやだめですよ。」

おかみさんは、封筒の中を見もせずに、それを長火鉢の引出しに仕舞ひ込んで笑ひながら言ふ。

「持つて來るよ。あとの支拂ひは、來年だ。」

「あんな事を。」

一萬圓。それだけあれば、電球がいくつ買へるだらう。私だつて、それだけあれば、一年らくに暮せるのだ。

ああ、何かこの人たちは、間違つてゐる。しかし、この人たちも、私の戀の場合と同じ樣に、かうでもしなければ、生きて行かれないのかも知れない。人はこの世の中に生れて來た以上は、どうしても生き切らなければいけないものならば、この人達のこの生き切るための姿も、憎むべきでないかも知れぬ。生きてゐる事。生きてゐる事。ああ、それは、何といふやりきれない息もたえだえの大事業であらうか。

「とにかくね。」

と隣室の紳士がおつしやる。

「これから東京で生活して行くにはだね、コンチワア、といふ輕薄きはまる挨拶が平氣で出來るやうでなければ、とても駄目だね。いまのわれらに、重厚だの、誠實だの、そんな美德を要求するのは、首くくりの足を引つぱるやうなものだ。重厚？　誠實？　ペッ、プッだ。生きて行けやしねえぢやないか。もしもだね、コンチワアを輕く言へなかつたら、あとは道が三つしか無いんだ、一つは歸農だ、一つは自殺、もう

一つは女のヒモさ。」

「その一つも出來やしねえ可哀想な野郎には、せめて最後の唯一の手段、」

と別な紳士が、

上原二郎にたかつて、痛飲。

ギロチン、ギロチン、シユルシユルシユ、ギロチン、ギロチン、シユルシユルシユ。

「泊るところがねえんだろ。」

と、上原さんは、低い聲でひとりごとのやうにおつしやつた。

私？」

私は自身に鎌首をもたげた蛇を意識した。敵意。それにちかい感情で、私は自分のからだを固くしたのである。

「ざこ寢が出來るか。寒いぜ。」

上原さんは、私の怒りに頓着なく呟く。

「無理でせう。」

とおかみさんは、口をはさみ、

「お可哀さうよ。」

ちえつ、と上原さんは舌打ちして、

「そんなら、こんなところへ來なければいいんだ。」

私は默つてゐた。このひとは、たしかに私のあの手紙を讀んだ。さうして、誰よりも私を愛してゐると、私はそのひとの言葉の雰圍氣から素早く察した。

「仕樣がねえな、福井さんのとこへでも、たのんでみようかな。チエちやん、連れて行つてくれないか。いや、女だけだと、途中が危險か。やつかいだな。かあさん、このひとのはきものを、こつそりお勝手のはうに廻して置いてくれ。僕が送りとどけて來るから。」

外は深夜の氣配だつた。風はいくぶんをさまり、空にいつぱい星が光つてゐた。私

たちは、ならんで歩きながら、
「私、ざこ寢でも何でも、出來ますのに。」
上原さんは、眠さうな聲で、
「うん。」
とだけ言つた。
「二人つきりに、なりたかつたのでせう。さうでせう。」
私がさう言つて笑つたら、上原さんは、
「これだから、いやさ。」
と口をまげて、にが笑ひなさつた。私は自分がとても可愛がられてゐる事を、身にしみて意識した。
「ずゐぶん、お酒を召し上りますのね。毎晩ですの？」
「さう、毎日。朝からだ。」

「おいしいの？　お酒が。」
「まづいよ。」
さう言ふ上原さんの聲に、私はなぜだか、ぞつとした。
「お仕事は？」
「駄目です。何を書いても、ばかばかしくつて、さうして、ただもう、悲しくつて仕様が無いんだ。いのちの黄昏。藝術の黄昏。人類の黄昏。それも、キザだね。」
「ユトリロ」
私は、ほとんど無意識にそれを言つた。
「ああ、ユトリロ。まだ生きてゐやがるらしいね。アルコールの亡者。死骸だね。最近十年間のあいつの繪は、へんに俗つぽくて、みな駄目。」
「ユトリロだけぢやないんでせう？　他のマイスターたちも全部、……」
「さう、衰弱。しかし、新しい芽も、芽のままで衰弱してゐるのです。霜。フロスト。

世界中に時ならぬ霜が降りたみたいなのです。」

上原さんは私の肩を輕く抱いて、私のからだは上原さんの二重廻しの袖で包まれたやうな形になつたが、私は拒否せず、かへつてぴつたり寄りそつてゆつくり歩いた。

路傍の樹木の枝。葉の一枚も附いてゐない枝、ほそく鋭く夜空を突き刺してゐて、

「木の枝つて、美しいものですわねえ。」

と思はずひとりごとのやうに言つたら、

「うん、花と眞黑い枝の調和が。」

と少しうろたへたやうにおつしやつた。

「いいえ、私、花も葉も芽も、何もついてゐない、こんな枝がすき。これでも、ちやんと生きてゐるのでせう。枯枝とちがひますわ。」

「自然だけは、衰弱せずか。」

さう言つて、また烈しい嚏(くしやみ)をいくつも續けてなさつた。

「お風邪ぢやございませんの？」

「いや、いや、さにあらず。實はね、これは僕の奇癖でね、お酒の醉が飽和點に達すると、たちまちこんな工合のくしやみが出るんです。醉ひのバロメーターみたいなものだね。」

「戀は？」

「え？」

「どなたかございますの？　飽和點くらゐにすすんでゐるお方が。」

「なんだ、ひやかしちやいけない。女は、みな同じさ。ややこしくていけねえ。ギロチン、ギロチン、シユルシユルシユ、實は、ひとり、いや、半人くらゐある。」

「私の手紙、ごらんになつて？」

「見た。」

「ご返事は？」

「僕は貴族は、きらひなんだ。どうしても、どこかに、鼻持ちならない傲慢なところがある。あなたの弟の直さんも、貴族としては、大出來の男なんだが、時々、ふつと、とても附き合ひ切れない小生意氣なところを見せる。僕は田舎の百姓の息子でね、こんな小川の傍をとほると必ず、子供のころ、故郷の小川で鮒を釣つた事や、めだかを掬つた事を思ひ出してたまらない氣持になる。」

暗闇の底で幽かに音立てて流れてゐる小川に、沿つた路を私たちは歩いてゐた。

「けれども、君たち貴族は、そんな僕たちの感傷を絶對理解できないばかりか、輕蔑してゐる。」

「ツルゲーネフは？」

「あついは貴族だ。だから、いやなんだ。」

「でも、獵人日記、……」

「うん、あれだけは、ちよつとうまいね。」

「あれは、農村生活の感傷、……」

「あの野郎は田舎貴族、といふところで妥協しようか。」

「私もいまでは田舎者ですわ。畑を作つてゐますのよ。田舎の貧乏人。」

「今でも、僕をすきなのかい。」

亂暴な口調であつた。

「僕の赤ちやんが欲しいのかい。」

私は答へなかつた。

岩が落ちて來るやうな勢ひでそのひとの顔が近づき、遮二無二私はキスされた。性慾のにほひのするキスだつた。私はそれを受けながら涙を流した。屈辱の、くやし涙に似てゐるにがい涙があつた。涙はいくらでも眼からあふれ出て、流れた。

また、二人ならんで歩きながら、

「しくじつた。惚れちやつた。」

とそのひとは言つて、笑つた。

けれども、私は笑ふ事が出來なかつた。眉をひそめて口をすぼめた。

仕方が無い。

言葉で言ひあらはすなら、そんな感じのものだつた。私は自分が下駄を引きずつてすさんだ歩き方をしてゐるのに氣がついた。

「しくじつた。」

とその男は、また言つた。

「行くところまで行くか。」

「キザですわ。」

「この野郎。」

上原さんは私の肩をとんとこぶしで叩いて、また大きいくしやみをなさつた。

福井さんとかいふお方のお宅では、みなさんがもうおやすみになつていらつしやる

様子であつた。

「電報、電報。福井さん、電報ですよ。」

と大聲で言つて、上原さんは玄關の戸をたたいた。

「上原か？」

と家の中で男のひとの聲がした。

「そのとほり。プリンスとプリンセスと一夜の宿をたのみに來たのだ。どうもかう寒いと、くしやみばかり出て、せつかくの戀の道行（みちゆき）もコメディになつてしまふ。」

玄關の戸が内からひらかれた。もうかなりの、五十歳を越したくらゐの、頭の禿げた小柄のをぢさんが、派手なパジヤマを着て、へんなはにかむやうな笑顔で私たちを迎へた。

「たのむ。」

と上原さんは一こと言つて、マントも脱がずにさつさと家の中へはひつて、

「アトリエは、寒くていけねえ。二階を借りるぜ。おいで。」

私の手をとつて、廊下をとほり突き當りの階段をのぼつて、暗い座敷にはひり、部屋の隅のスキツチをパチとひねつた。

「お料理屋のお部屋みたいね。」

「うん、成金趣味さ。でも、あんなヘボ畫かきにはもつたいない。惡運が強くて罹災も、しやがらねえ。利用せざるべからずさ。さあ、寢よう、寢よう。」

ご自分のお家みたいに、勝手に押入れをあけてお蒲團を出して敷いて、

「ここへ寢給へ。僕は歸る。あしたの朝、迎へに來ます。便所は、階段を降りて、すぐ右だ。」

だだだだと階段からころげ落ちるやうに騒々しく下へ降りて行つて、それつきり、しんとなつた。

私はまたスキツチをひねつて、電燈を消し、お父上の外國土産の生地で作つたビロードのコートを脱ぎ、帶だけほどいて着物のままでお床へはひつた。疲れてゐる上に、お酒を飲んだせゐか、からだがだるく、すぐにうとうとまどろんだ。

いつのまにか、あのひとが私の傍に寢てゐらして、……私は一時間ちかく、必死の無言の抵抗をした。

ふと可哀さうになつて、放棄した。

「かうしなければ、ご安心が出來ないのでせう？」

「まあ、そんなところだ。」

「あなた、おからだを惡くしていらつしやるんぢやない？　喀血なさつたでせう。」

「どうしてわかるの？　實はこなひだ、かなりひどいのをやつたのだけど、誰にも知らせてゐないんだ。」

「お母様のお亡くなりになる前と、おんなじ匂ひがするんですもの。」

「死ぬ氣で飲んでゐるんだ。生きてゐるのが、悲しくつて仕様が無いんだよ。わびし

さだの、淋しさだの、そんなゆとりのあるものでなくて、悲しいんだ。陰氣くさい、嘆きの溜息が四方の壁から聞えてゐる時、自分たちだけの幸福なんてある筈は無いぢやないか。自分の幸福も光榮も、生きてゐるうちには決して無いとわかつた時、ひとは、どんな氣持になるものかね。努力。そんなものは、ただ、飢餓の野獸の餌食になるだけだ。みじめな人が多すぎるよ。キザかね。」

「いいえ。」

「戀だけだね。おめえの手紙のお說のとほりだよ。」

「さう。」

私の戀は、消えてゐた。

夜が明けた。

部屋が薄明るくなつて、私は、傍で眠つてゐるそのひとの寢顏をつくづく眺めた。ちかく死ぬひとのやうな顏をしてゐた。疲れてゐるお顏だつた。

犧牲者の顏。貴い犧牲者。

私のひと。私の虹。マイ、チヤイルド。にくいひと。ずるいひと。

この世にまたと無いくらゐに、とても、美しい顏のやうに思はれ、戀があらたによみがへつて來たやうで胸がときめき、そのひとの髮を撫でながら、私のはうからキスをした。

かなしい、かなしい戀の成就。

上原さんは、眼をつぶりながら私をお抱きになつて、

「ひがんでゐたのさ。僕は百姓の子だから。」

もうこのひとから離れまい。

「私、いま幸福よ。四方の壁から嘆きの聲が聞えて來ても、私のいまの幸福感は、飽和點よ。くしやみが出るくらゐ幸福だわ。」

上原さんは、ふふ、とお笑ひになつて、

「でも、もう、おそいな。黄昏だ。」
「朝ですわ。」
弟の直治は、その朝に自殺してゐた。

七

直治の遺書。

姉さん。
だめだ。さきに行くよ。
僕は自分がなぜ生きてゐなければならないのか、それが全然わからないのです。
生きてゐたい人だけは、生きるがよい。

人間には生きる權利があると同樣に、死ぬる權利もある筈です。
僕のこんな考へ方は、少しも新しいものでも何でも無く、こんな當り前の、それこそプリミチヴな事を、ひとはへんにこはがつて、あからさまに口に出して言はないだけなんです。
生きて行きたいひとは、どんな事をしても、必ず強く生き拔くべきであり、それは見事で、人の榮冠とでもいふものも、きつとその邊にあるのでせうが、しかし、死ぬことだつて、罪では無いと思ふんです。
僕は、僕といふ草は、この世の空氣と陽の中に、生きにくいんです。生きて行くのに、どこか一つ缺けてゐるんです。足りないんです。いままで、生きて來たのも、これでも精一ぱいだつたのです。
僕は高等學校へはひつて、僕の育つて來た階級と全くちがふ階級に育つて來た強くたくましい草の友人と、はじめて附き合ひ、その勢ひに押され、負けまいとして、麻

薬を用ゐ、半狂亂になつて抵抗しました。それから兵隊になつて、やはりそこでも、生きる最後の手段として阿片を用ゐました。姉さんには僕のこんな氣持、わからねえだらうな。

僕は下品になりたかつた。強く、いや強暴になりたかつた。さうして、それが、所謂民衆の友になり得る唯一の道だと思つたのです。お酒くらゐでは、とても駄目だつたんです。いつも、くらくら目まひをしてゐなければならなかつたんです。そのためには麻薬以外になかつたのです。僕は家を忘れなければならない。父の血に反抗しなければならない。母の優しさを、拒否しなければならない。姉に冷たくしなければならない。さうでなければ、あの民衆の部屋にはひる入場券が得られないと思つてゐたんです。

僕は下品になりました。下品な言葉づかひをするやうになりました。けれども、それは半分は、いや、六十パーセントは、哀れな附け燒刃でした。へたな小細工でした。民衆にとつて、僕はやはり、キザつたらしく乙にすました氣づまりの男でした。

彼等は僕と、しんから打ち解けて遊んでくれはしないのです。しかし、また、いまさら捨てたサロンに歸ることも出來ません。いまでは僕の下品は、たとひ六十パーセントは人工の附け燒刃でも、しかし、あとの四十パーセントは、ほんものの下品になつてゐるのです。僕はあの、所謂上流サロンの鼻持ちならないお上品さには、ゲロが出さうで、一刻も我慢できなくなつてゐますし、また、あのおえらがたとか、お歴々とか稱せられてゐる人たちも、僕のお行儀の悪さに呆れてすぐさま放逐するでせう。捨てた世界に歸ることも出來ず、民衆からは悪意に滿ちたクソていねいの傍聽席を與へられてゐるだけなんです。

いつの世でも、僕のやうな謂はば生活力が弱くて、缺陷のある草は、思想もクソも無いただおのづから消滅するだけの運命のものなのかも知れませんが、しかし、僕にも、少しは言ひぶんがあるのです。とても僕には生きにくい、事情を感じてゐるんです。

人間は、みな、同じものだ。

これは、いつたい、思想でせうか。僕はこの不思議な言葉を發明したひとは、宗教家でも哲學者でも藝術家でも無いやうに思ひます。民衆の酒場からわいて出た言葉です。蛆がわくやうに、いつのまにやら、誰が言ひ出したともなく、もくもく湧いて出て、全世界を覆ひ、世界を氣まづいものにしました。

この不思議な言葉は、民主々義とも、またマルキシズムとも、全然無關係のものなのです。それは、かならず、酒場に於いて醜男が美男子に向つて投げつけた言葉です。ただの、イライラです。嫉妬です。思想でも何でも、ありやしないんです。

けれども、その酒場のやきもちの怒聲が、へんに思想めいた顏つきをして民衆のあひだを練り歩き、民主々義ともマルキシズムとも全然、無關係の言葉の筈なのに、いつのまにやら、その政治思想や經濟思想にからみつき、奇妙に下劣なあんばいにしてしまつたのです。メフイストだつて、こんな無茶な放言を、思想とすりかへるなんて

藝當は、さすがに良心に恥ぢて、躊躇したかも知れません。

人間は、みな、同じものだ。

なんといふ卑屈な言葉であらう。人をいやしめると同時に、みづからをもいやしめ、何のプライドも無く、あらゆる努力を放棄せしめるやうな言葉。マルキシズムは、働く者の優位を主張する。同じものだ、などとは言はぬ。民主々義は、個人の尊嚴を主張する。同じものだ、などとは言はぬ。ただ牛太郎だけがそれを言ふ。

「へへ、いくら氣取つたつて、同じ人間ぢやねえか。」

なぜ、同じだと言ふのか。優れてゐる、と言へないのか。奴隷根性の復讐。

けれども、この言葉は、實に猥せつで、不氣味で、ひとは互ひにおびえ、あらゆる思想が姦せられ、努力は嘲笑せられ、幸福は否定せられ、美貌はけがされ、光榮はひきずりおろされ、所謂「世紀の不安」は、この不思議な一語からはつしてゐると僕は思つてゐるんです。

イヤな言葉だと思ひながら、僕もやはりこの言葉に脅迫せられ、おびえて震へて、何を仕様としてもてれくさく、絶えず不安で、ドキドキして身の置きどころが無く、いつそ酒や麻薬の目まひに依つてつかのまの落ちつきを得たくて、さうして、めちやくちやになりました。

弱いのでせう。どこか一つ重大な缺陷のある草なのでせう。また、何かとそんな小理窟を並べたつて、なあに、もともと遊びが好きなのさ、なまけ者の、助平の、身勝手な快樂兒なのさ、と、れいの牛太郎がせせら笑つて言ふかも知れません。さうして、僕はさう言はれても、いままでは、ただてれて、あいまいに首肯してゐましたが、しかし、僕も死ぬに當つて、一言、抗議めいた事を言つて置きたい。

姉さん。

信じて下さい。

僕は、遊んでも少しも樂しくなかつたのです。快樂のイムポテンツなのかも知れません。僕はただ、貴族といふ自身の影法師から離れたくて、狂ひ、遊び、荒んでゐました。

姉さん。

いつたい、僕たちに罪があるのでせうか。貴族に生れたのは僕たちの罪でせうか。ただ、その家に生れただけに、僕たちは、永遠に、たとへばユダの身内の者みたいに、恐縮し、謝罪し、はにかんで生きてゐなければならない。

僕は、もつと早く死ぬべきだつた。しかし、たつた一つ、ママの愛情。それを思ふと、死ねなかつた。人間は、自由に生きる權利を持つてゐると同樣に、いつでも勝手に死ねる權利を持つてゐるのだけれども、しかし、「母」の生きてゐるあひだは、その死の權利は留保されなければならないと僕は考へてゐるんです。それは同時に、「母」をも殺してしまふ事になるのですから。

いまはもう、僕が死んでも、からだを惡くするほど悲しむひともゐないし、いいえ

姉さん、僕は知つてゐるんです、僕を失つたあなたたちの悲しみはどの程度のものだか、いいえ、虚飾の感傷はよしませう、あなたたちは僕の死を知つたら、きつとお泣きになるでせうが、しかし、僕の生きてゐる苦しみと、さうしてそのイヤな生から完全に解放される僕のよろこびを思つてみて下さつたら、あなたたちのその悲しみは、次第に打ち消されて行く事と存じます。

僕の自殺を非難し、あくまでも生き伸びるべきであつた、と僕になんの助力も與へず口先だけで、したり顔に批判するひとは、陛下に菓物屋をおひらきなさるやう平氣でおすすめ出來るほどの大偉人にちがひございませぬ。

姉さん。

僕は死んだはうがいいんです。僕には、所謂生活能力が無いんです。お金の事で、人と爭ふ力が無いんです。僕は、人にたかる事さへ出來ないんです。上原さんと遊んでも、僕のぶんのお勘定は、いつも僕が拂つて來ました。上原さんは、それを貴族のケチくさいプライドだと言つて、とてもいやがつてゐましたが、しかし、僕は、プライドで支拂ふのではなくて、上原さんのお仕事で得たお金で、僕がつまらなく飲み食ひして、女を抱くなど、おそろしくて、とても出來ないのです。上原さんのお仕事を尊敬してゐるから、と簡單に言ひ切つてしまつても、ウソで、僕にも本當は、はつきりわかつてゐないんです。ただ、ひとのごちそうになるのが、そらおそろしいんです。殊にも、そのひとご自身の腕一本で得たお金で、ごちそうになるのは、つらくて、心苦しくてたまらないんです。

さうしてただもう、自分の家からお金や品物を持ち出して、ママやあなたを悲しませ、僕自身も、少しも樂しくなく、出版業など計畫したのも、ただ、てれかくしのお體裁で、實はちつとも本氣で無かつたのです。本氣でやつてみたところで、ひとのごちそうにさへなれないやうな男が、金まうけなんて、とてもとても出來やしないのは、いくら僕が愚かでも、それくらゐの事には氣附いてゐます。

姉さん。

僕たちは、貧乏になつてしまひました。生きて在るうちは、ひとにごちそうしたいと思つてゐたのに、もう、ひとのごちそうにならなければ生きて行けなくなりました。

姉さん。

この上、僕は、なぜ生きてゐなければならねえのかね？　もう、だめなんだ。僕は、死にます。らくに死ねる薬があるんです。兵隊の時に、手にいれて置いたのです。

姉さんは美しく、（僕は美しい母と姉を誇りにしてゐました）さうして、賢明だから、僕は姉さんの事に就いては、なんにも心配してゐませぬ。心配などする資格さへ僕には有りません。どろぼうが被害者の身の上を思ひやるみたいなもので、赤面するばかりです。きつと姉さんは、結婚なさつて、子供が出來て、夫にたよつて生き抜いて行くのではないかと僕は、思つてゐるんです。

姉さん。

僕に、一つ、秘密があるんです。

永いこと、秘めに秘めて、戰地にゐても、そのひとの事を思ひつめて、そのひとの夢を見て、目がさめて、泣きべそをかいた事も幾度あつたか知れません。

そのひとの名は、とても誰にも、口がくさつても言はれないんです。僕は、いま死ぬのだから、せめて、姉さんにだけでも、はつきり言つて置かうか、と思ひましたが、やつぱり、どうにもおそろしくて、その名を言ふことが出來ません。

でも、僕はその秘密を、絶對秘密のまま、たうとうこの世で誰にも打ち明けず、胸の奥に藏して死んだならば、僕のからだが火葬にされても、胸の裏だけが生臭く焼け残るやうな氣がして、不安でたまらないので、姉さんにだけ、遠まはしに、ぼんやり、フイクションみたいにして教へて置きます。フイクション、といつても、しか

し、姉さんは、きつとすぐその相手のひとは誰だか、お氣附きになる筈です。フイクションといふよりは、ただ假名を用ゐる程度のごまかしなのですから。

姉さんは、ご存じかな？

姉さんはそのひとをご存じの筈ですが、しかし、おそらく、逢つた事は無いでせう。そのひとは、姉さんよりも、少し年上です。一重瞼で、目尻が吊り上つて、髪にパーマネントなどかけた事が無く、いつも強く、ひつつめ髪、とでもいふのかしら、そんな地味な髪形で、さうして、とても貧しい服裝で、けれどもだらしない恰好ではなくて、いつもきちんと着附けて、清潔です。そのひとは戰後あたらしいタッチの畫をつぎつぎと發表して急に有名になつた或る中年の洋畫家の奥さんで、その洋畫家の行ひは、たいへん亂暴ですさんだものなのに、その奥さんは平氣を裝つて、いつも優しく微笑んで暮してゐるのです。

僕は立ち上つて、

「それでは、おいとま致します。」

そのひとも立ち上つて、何の警戒も無く、僕の傍に歩み寄つて、僕の顔を見上げ、

「なぜ？」

と普通の音聲で言ひ、本當に不審のやうに少し小首をかしげて、しばらく僕の眼を見つづけてゐました。さうして、そのひとの眼に、何の邪心も虚飾も無く、僕は女のひとと視線が合へば、うろたへて視線をはづしてしまふたちなのですが、その時だけは、みぢんも含羞（はにかみ）を感じないで、二人の顔が一尺くらゐの間隔で、六十秒もそれ以上もとてもいい氣持で、そのひとの瞳を見つめて、それからつい微笑んでしまつて、

「でも、……」

「すぐ歸りますわよ。」

と、やはり、まじめな顔をして言ひます。

正直、とは、こんな感じの表情を言ふのではないかしら、とふと思ひました。それ

は修身教科書ください、いかめしい德ではなくて、正直といふ言葉で表現せられた本來の德は、こんな可愛らしいものではなかつたのかしら、と考へました。

「またまゐります。」

「さう。」

はじめから終りまで、すべてみな何でもない會話です。僕が、或る夏の日の午後、その洋畫家のアパートをたづねて行つて、洋畫家は不在で、けれどもすぐ歸る筈ですから、おあがりになつてお待ちになつたら？　といふ奥さんの言葉に從つて、部屋にあがつて、三十分ばかり雜誌など讀んで、歸つて來さうも無かつたから、立ち上つて、おいとました、それだけの事だつたのですが、僕は、その日のその時の、そのひとの瞳に、くるしい戀をしちやつたのです。

高貴、とでも言つたらいいのかしら。僕の周圍の貴族の中には、ママはとにかく、あんな無警戒な「正直」な眼の表情の出來る人は、ひとりもゐなかつた事だけは斷言できます。

それから僕は、或る冬の夕方、そのひとのプロフイルに打たれた事があります。やはり、その洋畫家のアパートで、洋畫家の相手をさせられて、炬燵にはひつて朝から酒を飲み、洋畫家と共に、日本の所謂文化人たちをクソミソに言ひ合つて笑ひころげ、やがて洋畫家は倒れて大鼾をかいて眠り、僕も横になつてうとうとしてゐたら、ふはと毛布がかかり、僕は薄目をあけて見たら、東京の冬の夕空は水色に澄んで、奥さんはお孃さんを抱いてアパートの窓緣に、何事も無ささうにして腰をかけ、奥さんの端正なプロフイルが、水色の遠い夕空をバックにして、あのルネッサンスの頃のプロフイルの畫のやうにあざやかに輪郭が區切られ浮んで、僕にそつと毛布をかけて下さつた親切は、それは何の色氣でも無く、慾でも無く、ああ、ヒユウマニティといふ言葉はこんな時にこそ使用されて蘇生する言葉なのではなからうか、ひとの當然の佗びしい思ひやりとして、ほとんど無意識みたいになされたもののやうに、繪とそつく

りの靜かな氣配で、遠くを眺めていらつしやつた。

僕は眼をつぶつて、こひしく、こがれて狂ふやうな氣持ちになり、瞼の裏から涙があふれ出て、毛布を頭から引かぶつてしまひました。

姉さん。

僕がその洋畫家のところに遊びに行つたのは、それは、さいしよはその洋畫家の作品の特異なタッチと、その底に祕められた熱狂的なパッションに、醉はされたせゐでありましたが、しかし、附き合ひの深くなるにつれて、そのひとの無教養、出鱈目、きたならしさに興覺めて、さうして、それと反比例して、そのひとの奥さんの心情の美しさにひかれ、いいえ、正しい愛情のひとがこひしくて、したはしくて、奥さんの姿を一目見たくて、あの洋畫家の家へ遊びに行くやうになりました。

あの洋畫家の作品に、多少でも、藝術の高貴なにほひ、とでもいつたやうなものが現れてゐるとすれば、それは、奥さんの優しい心の反映ではなからうかとさへ、僕は

いままでは考へてゐるんです。

その洋畫家は、僕はいまこそ、感じたままをはつきり言ひますが、ただ大酒飲みで遊び好きの、巧妙な商人なのです。遊ぶ金がほしさに、ただ出鱈目にカンヴァスに繪具をぬたくつて、流行の勢ひに乘り、もつたい振つて高く賣つてゐるのです。あのひとの持つてゐるのは、田舍者の圖々しさ、馬鹿な自信、ずるい商才、それだけなんです。

おそらくあのひとは、他のひとの繪は、外國人の繪でも日本人の繪でも、なんにもわかつてゐないでせう。おまけに、自分で畫いてゐる繪も、何の事やらご自身わかつてゐないでせう。ただ遊興のための金がほしさに、無我夢中で繪具をカンヴァスにぬたくつてゐるだけなんです。

さうして、さらに驚くべき事は、あのひとはご自身のそんな出鱈目に、何の疑ひも、羞恥も、恐怖も、お持ちになつてゐないらしいといふ事です。

ただもう、お得意なんです。何せ、自分で畫いた繪が自分でわからぬといふひとなのですから、他人の仕事のよさなどわかる筈が無く、いやもう、けなす事、けなす事。

つまり、あのひとのデカタン生活は、口では何のかのと苦しさうな事を言つてゐますけれども、その實は、馬鹿な田舍者が、かねてあこがれの都に出て、かれ自身意外なくらゐの成功をしたので有頂天になつて遊びまはつてゐるだけなんです。

いつか僕が、

「友人がみな怠けて遊んでゐる時、自分ひとりだけ勉强するのは、てれくさくて、おそろしくて、とてもだめだから、ちつとも遊びたくなくても、自分も仲間入りして遊ぶ。」

と言つたら、その中年の洋畫家は、

「へえ？　それが貴族氣質（かたぎ）といふものかね、いやらしい。僕は、ひとが遊んでゐるのを見ると、自分も遊ばなければ、損だ、と思つて大いに遊ぶね。」

と答へて平然たるものでしたが、僕はその時、その洋畫家を、しんから輕蔑しました。このひとの放埒には苦惱が無い。むしろ馬鹿遊びを自慢にしてゐる。ほんものの阿呆の快樂兒。

けれども、この洋畫家の惡口をこの上さまざまに述べ立てても、姉さんには關係の無い事ですし、また僕もいま死ぬるに當つて、やはりあのひととの永いつき合ひを思ひ、なつかしく、もう一度逢つて遊びたい衝動をこそ感じますが、憎い氣はちつとも無いのですし、あのひとだつて淋しがりの、とてもいいところをたくさん持つてゐるひとなのですから、もう何も言ひません。

ただ、僕は姉さんに、僕がそのひとの奥さんにこがれて、うろうろして、つらかつたといふ事だけを知つていただいたらいいのです。だから、姉さんはそれを知つても、別段、誰かにその事を訴へ、弟の生前の思ひをとげさせてやるとか何とか、そん

なキザなおせつかいなどなさる必要は絶對に無いのですし、姉さんおひとりだけが知つて、さうして、こつそり、ああ、さうか、と思つて下さつたらそれでいいんです。なほまた慾を言へば、こんな僕の恥づかしい告白に依つて、せめて姉さんだけでも、僕のこれまでの生命の苦しさを、さらに深くわかつて下さつたら、とても僕は、うれしく思ひます。

僕はいつか、奥さんと、手を握り合つた夢を見ました。さうして奥さんも、やはりずつと以前から僕を好きだつたのだといふ事を知り、夢から醒めても、僕の手のひらに奥さんの指のあたたかさが殘つてゐて、僕はもう、これだけで滿足して、あきらめなければなるまいと思ひました。道徳がおそろしかつたのではなく、僕にはあの半氣違ひの、いや、ほとんど狂人と言つてもいいあの洋畫家が、おそろしくてならないのでした。あきらめようと思ひ、胸の火をほかへ向けようとして、手當り次第、さすがのあの洋畫家も或る夜しかめつらをしたくらゐひどく、滅茶苦茶にいろんな女と遊び狂ひました。何とかして、奥さんの幻から離れ、忘れ、なんでもなくなりたかつたんです。けれども、だめ。僕は、結局、ひとりの女にしか、戀の出來ないたちの男なんです。僕は、はつきり言へます。僕は、奥さんの他の女友達を、いちどでも、美しいとか、いぢらしいとか感じた事が無いんです。

姉さん。

死ぬ前に、たつた一度だけ書かせて下さい。

スガちやん。

その奥さんの名前です。

僕がきのふ、ちつとも好きでもないダンサア（この女には、本質的な馬鹿なところがあります）それを連れて、山莊へ來たのは、けれども、まさかけさ死なうと思つて、やつて來たのではなかつたのです。いつか、近いうちに必ず死ぬ氣でゐたのですが、でも、きのふ、女を連れて山莊へ來たのは、女に旅行をせがまれ、僕も東京で遊

ぶのに疲れて、この馬鹿な女と二、三日、山莊で休むのもわるくないと考へ、姉さんには少し工合ひが悪かつたけど、とにかくここへ一緒にやつて來てみたら、姉さんは東京のお友達のところへ出掛け、その時ふと、僕は死ぬなら今だ、と思つたのです。

僕は昔から、西片町のあの家の奥の座敷で死にたいと思つてゐました。街路や原つぱで死んで、彌次馬たちに死骸をいぢくり廻されるのは、何としても、いやだつたんです。けれども、西片町のあの家は人手に渡り、いまではやはりこの山莊で死ぬよりほかは無からうと思つてゐたのですが、でも、僕の自殺をさいしよに發見するのは姉さんで、さうして姉さんは、その時どんなに驚愕し恐怖するだらうと思へば、姉さんと二人きりの夜に自殺するのは氣が重くて、とても出來さうも無かつたのです。

それが、まあ、何といふチャンス。姉さんがゐなくて、そのかはり、頗る鈍物のダンサアが、僕の自殺の發見者になつてくれる。

昨夜、ふたりでお酒を飲み、女のひとを二階の洋間に寢かせ、僕ひとりママの亡くなつた下のお座敷に蒲團をひいて、さうして、このみじめな手記にとりかかりました。

姉さん。

僕には、希望の地盤が無いんです。さようなら。

結局、僕の死は、自然死です。人は、思想だけでは、死ねるものでは無いんですから。それから、一つ、とてもてれくさいお願ひがあります。ママのかたみの麻の着物。あれを姉さんが、直治が來年の夏に着るやうにと縫ひ直して下さつたでせう。あの着物を、僕の棺にいれて下さい。僕、着たかつたんです。

夜が明けて來ました。永いこと苦勞をおかけしました。

さようなら。

ゆうべのお酒の醉ひは、すつかり醒めてゐます。僕は、素面(しらふ)で死ぬんです。

もういちど、さようなら。

姉さん。
僕は、貴族です。

八

ゆめ。
皆が私から離れて行く。
直治の死のあと始末をして、それから一箇月間、私は冬の山荘にひとりで住んでゐた。
さうして私は、あのひとに、おそらくはこれが最後の手紙を、水のやうな氣持で、書いて差し上げた。

どうやら、あなたも、私をお捨てになつたやうでございます。いいえ、だんだんお忘れになるらしうございます。
けれども、私は、幸福なんですの。私の望みどほりに、赤ちやんが出來たやうでございますの。私は、いま、いつさいを失つたやうな氣がしてゐますけど、でも、おなかの小さい生命が、私の孤獨の微笑のたねになつてゐます。
けがらはしい失策などとは、どうしても私には思はれません。この世の中に、戰爭だの平和だの貿易だの組合だの政治だのがあるのは、なんのためだか、このごろ私にもわかつて來ました。あなたは、ご存じないでせう。だからいつまでも不幸なのですわ。それはね、教へてあげますわ、女がよい子を生むためです。
私には、はじめからあなたの人格とか責任とかをあてにする氣持はありませんでした。私のひとすぢの戀の冒險の成就だけが問題でした。さうして、私のその思ひが完成せられて、もういまでは私の胸のうちは、森の中の沼のやうに靜かでございます。

私は、勝つたと思つてゐます。

マリヤが、たとひ夫の子でない子を生んでも、マリヤに輝く誇りがあつたら、それは聖母子になるのでございます。

私には、古い道徳を平氣で無視して、よい子を得たといふ滿足があるのでございます。

あなたは、その後もやはり、ギロチンギロチンと言つて、紳士やお嬢さんたちとお酒を飲んで、デカタン生活とやらをお續けになつていらつしやるのでせう。でも、私は、それをやめよ、とは申しませぬ。それもまた、あなたの最後の闘爭の形式なのでせうから。

お酒をやめて、ご病氣をなほして、長生きをなさつて立派なお仕事を、などそんな白々しいおざなりみたいなことは、もう私は言ひたくないのでございます。「立派なお仕事」などよりも、いのちを捨てる氣で、所謂惡德生活をしとほす事のはうが、の

ちの世の人たちからかへつて御禮を言はれるやうになるかも知れません。

犧牲者。道德の過渡期の犧牲者。あなたも、私も、きつとそれなのでございませう。

革命は、いつたい、どこで行はれてゐるのでせう。すくなくとも、私たちの身のまはりに於いては、古い道德はやつぱりそのまま、みぢんも變らず、私たちの行く手をさへぎつてゐます。海の表面の波は何やら騒いでゐても、その底の海水は、革命どころか、みじろぎもせず、狸寢入りで寢そべつてゐるんですもの。

けれども私は、これまでの第一回戰では、古い道德をわづかながら押しのけ得たと思つてゐます。さうして、こんどは、生れる子と共に、第二回戰、第三回戰をたたかふつもりでゐるのです。

こひしいひとの子を生み、育てる事が、私の道德革命の完成なのでございます。

あなたが私をお忘れになつても、また、あなたが、お酒でいのちをお無くしになつ

ても、私は私の革命の完成のために、丈夫で生きて行けさうです。

あなたの人格のくだらなさを、私はこなひだも或るひとから、さまざま承りましたが、でも、私にこんな強さを與へて下さつたのは、あなたです。私の胸に、革命の虹をかけて下さつたのはあなたです。生きる目標を與へて下さつたのは、あなたです。

私はあなたを誇りにしてゐますし、また、生れる子供にもあなたを誇りにさせようと思つてゐます。

私生兒と、その母。

けれども私たちは、古い道德とどこまでも爭ひ、太陽のやうに生きるつもりです。どうか、あなたも、あなたの闘ひをたたかひ續けて下さいまし。

革命は、まだ、ちつとも、何も、行はれてゐないです。もつと、もつと、いくつもの惜しい貴い犧牲が必要のやうでございます。

いまの世の中で、一ばん美しいのは犧牲者です。

小さい犧牲者がもうひとりゐました。

上原さん。

私はもうあなたに、何もおたのみする氣はございませんが、けれども、その小さい犧牲者のために、一つだけ、おゆるしをお願ひしたい事があるのです。

それは、私の生れた子を、たつたいちどでよろしうございますから、あなたの奥さまに抱かせていただきたいのです。さうして、その時、私にかう言はせていただきます。

「これは、直治が、或る女のひとに内證に生ませた子ですの。」

なぜ、さうするのか、それだけはどなたにも申し上げられません。いいえ、私自身にも、なぜさうさせていただきたいのか、よくわかつてゐないのです。でも、私は、どうしても、さうさせていただかなければならないのです。直治といふあの小さい犧牲者のために、どうしても、さうさせていただかなければならないのです。

16581

ご不快でせうか。ご不快でも、しのんでいただきます。これが捨てられ、忘れかけられた女の唯一の慰かないやがらせと思召し、ぜひお聞きいれのほど願ひます。

M・C　マイ・コメデアン。

昭和二十二年二月七日

——了——

昭和二十三年七月六日　印刷
昭和二十三年七月十日　發行
昭和二十三年十一月八日　四刷

定價百參拾圓

著者　太宰治
東京都新宿區矢來町七一番地

發行者　佐藤義夫
東京都千代田區神田神保町三ノ三

印刷者　塚田十五郎
東京都新宿區矢來町七一番地

發行所　株式會社　新潮社
會員番號A一一九〇四〇
電話九段一一一一五五番
一一一一五六番
一一一一五七番

東京都千代田區神田淡路町二ノ九
配給元　日本出版配給株式會社

斜陽

東京都千代田區神田神保町三ノ三　塚田印刷所印刷

太宰治代表作集

晩年

太宰治が世に問うた最初の作品である。その藝術性、近代性は全太宰文學を豫定するもので、愛好家研究家の必讀書であらう。

圓十七百價

女の決闘

中期七つの名編に書かれてゐるものは、潔癖な倫理の問題、近代的知性、强烈な感受性のための苦難の刻印である。

圓十二百價

斜陽

美と戀のために滅びゆく四人の運命の物語。全編にみなぎる詩情とニュアンスは太宰最高傑作の名に値するであらう。

圓十三百價

初期、中期、後期の傑作

新潮社版

F13
D49-2

24 年 5 月 9 日 482

131 (2)

閱八 閱二 閱八 閱八 閱八 閱八 閱九 閱八 閱八 閱九 閱六 閱八 閱八 閱一 閱六 閱一 閱六 閱一

終